Book Review 李栄薫 著『反日種族主義 日韓危機の根源』（文藝春秋）を読む

反日史観と闘う韓国知性たちの挑戦

久保田るり子
（産経新聞編集委員、國學院大學客員教授）

二〇〇八年夏、書物で溢れるソウル大研究室でインタビューを終え、立ちあがった私を出口に案内しながら、李栄薫教授はこう語っていた。

「ここが韓国の最高学府なのですが、私に賛同する人はいない。それが、韓国の現状なんです」

李氏は、教科書の是正運動「教科書フォーラム」を率いていた。三年がかりで「代案教科書　韓国近現代史」を完成させたばかりだった。韓国左派政権下で近現代史教科書は大きく左傾化し、南北統一を美化し、南侵した金日成の記述がなかった。フォーラムは転向した元主体思想派（北朝鮮を信奉する学生活動家）にも執筆を依頼し、北朝鮮の現実を伝える教養書の代案教科書を出版した。当時、彼らは「ニューライト（新保守）」と名乗っていた。

韓国知識人の左派史観との闘いは続いた。そして二〇一九年七月、衝撃の書『反日種族主義』が世に出た。この本で、李氏は韓国人の意識下にある情緒を「反日種族主義」と名付け見事に摘出した。その種族主義が育ててきた「嘘をつく国民、嘘をつく政治、嘘つきの学問」の姿を実証でくっきりと描き出し、韓国人自身に突き付けた。

李氏の視座はかねてから一貫している。それは「この国が知性を取り戻さなければ、亡国が現実になる」というものだ。李栄薫氏は李朝末期の社会経済史が専門分野で「日本統治の法と制度が韓国の近代化に寄与した」とする植民地近代化論者の一人だ。一九九〇年代に土地調査事業検証

の論文を書いたが、国史学会から「親日派」と否定され批判されてきた。フィールドワークで積み重ねてきた研究の成果は、つねに「反日史観」の批判に晒された。反日種族主義と闘ってきたのは李栄薫氏その人自身なのである。

韓国で『反日種族主義』という本の出現は社会的事件となった。韓国では「反日」を批判することは、学者にとって「自殺行為」だった。大学を追われ学界から追放された例があまたある。原始的で粗暴な情念を連想させる「反日種族主義」というタイトルは多くの韓国人を惹きつけた。一か月で十万部を突破した。反日を当たり前と疑わなかった人々の中に、「われわれのなかの反日の正体」への驚きと反発が広がった。

四か月後に日本で出版された日本語版『反日種族主義』は四十一万部という大ベストセラーになった。日本人がこれほど関心を示したのは、①韓国発の見識ある歴史観②歴史歪曲の驚くべき実態③執筆陣の歴史に対する真摯な態度④死生観やシャーマニムズなど興味深い分析――などによる。「反日種族主義」は日韓の間に相互理解のテーブルを置いた。

この本は、日本人に韓国人の反日の根深さを思い知らせる。韓国人の自然観としての「国土身体論」、土地には気脈が流れているという土地気脈論から、詩人、高銀が竹島を「胆のう独島」と謳って、「独島の岩を砕けば韓国人の血が流れる」と副題をつけたとの逸話は、シャーマニズムの精神世界と民族意識の融合という情念を改めて想起させる。（独島、反日種族主義の最高象徴、反日種族主義の神学）

朝鮮民族にとって「民族」とは何であるのか、またその「民族」という言葉を、韓国の左派や従北勢力がどのように政治利用してきたのかも、盧武鉉政権下に行われた「反民族行為者」の「親日派」へのすり替え政策で理解が深まる。民族とは「われわれ」→その反語としての反民族→反民族は「親日」それは「売国」→だから「愛国」とは「反日」として政治化したのだった。（親日清算という詐欺劇）

そして「第三部、種族主義の牙城、慰安婦」はこの本の核心である。建国後の朝鮮戦争の韓国軍慰安婦や米軍慰安婦の学術的研究や、朝鮮王朝時代の公娼制と性支配の歴史考察を踏まえて、戦時下の日本軍慰安婦について実証的に分析した。そのうえで日韓関係を破綻させた韓国慰安婦支援団体の活動を批判し、「貧しい家の女性をだまして慰安

婦にしたのも、社会的蔑視で息を殺させたのもわれわれ韓国人ではありませんか」と人々に問うた。事実の重みがここにある。

だが、韓国の反日の岩盤は固く厚い。反日種族主義とは過去の話ではなく、現在の韓国対日政策の底流に息づく病巣だ。わたしたちはいま、種族主義が育ててきた反日韓国の最前線を目前に見ている。この一年、韓国では反論本が出版され、左派系研究機関の攻撃的な集会やシンポジウムも開かれた。慰安婦問題などで韓国政府の立場を代弁してきた既存メディアは、自己検証をせず警告の書である「反日種族主義」を認知しようとしない。韓国の保守政治勢力も同様だ。李氏らは歴史学会に公開討論を求めたが学会は応じていない。

二〇二〇年五月、李氏らは第二弾の本『反日種族主義との闘争』を出版した。「闘争」の名の通り、「反日種族主義」を批判した学者たちの名前を挙げ、主張を明示したうえで、より深く鋭く彼らの種族主義を批判した。執筆グループにひるんでいる暇はない。反日種族主義はいま、権力の中に息づいている。韓国の知性がこれに挑みかかった。その熱い想いに、読者は圧倒されるのである。